野間清治の書簡

大里仁一

半紙に墨書された野間清治の書簡が見つかり原書簡は図書館に収蔵されている。

半紙に墨書された手紙には、拝啓、

「　小生義今般不得已つまらぬ者と結婚致候

未だ顔を見ず未だ性質も家柄未何にも知らず、明後日地入船後始めて分かる訳妙な訳に御座候

然し兎に角結婚致す次第に御座候親友のよしみ是非　々々、御祝儀沢山募集方、ご周旋奉願候

一生一度のことにて候　大至御急骨折奉願候　」

長沢兄京時次五代堀口諸氏至つて壮建築御安意可被遊び候

相馬　兄
真井　兄　　野間清治
長島　兄

この手紙は、明治四十年八月のものである。清治は明治三十五年、東京帝国大学文科大学内中等学校教員の養成を目的として設置された第一臨時教員養成所を、相生尋常小学校の在職のまま受験し合格した。

校長、郡長、知事の許可を得ず無断で受験したため、四月の入学が許されず、川内尋常高等小学校首席訓導に転出後、山田郡長森重剛士毅、はじめおおくの関係者の取り計らいで、暑中休暇後に入学できた。

二年間の修学の後、最も初任給が高かった沖縄中学校を望んで就職した。この中学校で評価されたものと思われるが、明治四十年三月一日付で沖縄県視学に抜擢され、この年結婚したのである。

この縁談をまとめたのは沖縄中学校の大久保周八校長。大久保は前任校徳島県女子師範学校教頭時代の教え子服部左衛子を清治の花嫁候補と考えていたようである。

東京への出張に際し「君の結婚相手を探してくる。私に一任せるか」という大久保の言葉に清治は同意した。

彼は自伝「私の半生」（昭和十一年刊行）の中で「人生の重大事を軽率に扱ったかのように思われるが、そうではない。

信ずる人に私を任せるのは私の流儀」と述べている。左衛子も同じ思いであったのかも知れない。結婚式と披露宴は沖縄の友人達の発案と周到な準備で、大久保校長と左衛子を乗せた船が那覇港に着いた八月一日、その日のうちに行われた。

清治は「三三九度の盃が、型のごとく取り交わされたのであるが、その厳粛な瞬間、初めて二人は、顔と顔の幾分かは顔を見合うことができた」と述べている。

手紙の宛先の相馬兄、真井兄、長島兄であるが、この三人はいずれも清治が卒業した群馬県師範学校の先輩で、相馬庄平は桐生尋常小学校長、真井晃は相生南尋常小学校長、長島織吉は山田郡境野尋常高等小学校長であった。手紙文末に書かれていた長沢、時次、五代、堀口の消息については、長沢半作は群馬県師範学校の先生から那覇商業学校に、同窓生の時沢忠次は首里の小学校に迎え、先輩の五代為一郎や桐生北尋常小学校長であった堀口米造も沖縄の小学校に迎えていた

清治は郷故里の教員達を招いて沖縄の教育に尽くそうとしていたことがわかる。

「野間文庫読書推進賞」受賞候補者推薦について

―今回は生誕の碑建立特別推進賞を贈呈します―

講談社の創業者で“世界の雑誌王”といわれた野間清治は、ふるさと桐生の学校へ本を送り続けた。

今、八十歳を超える方々の話には「“本など買えない時代、講談社が運んでくれた本は、実に楽しかったと“」「のらくろ」「冒険ダン吉」「少年倶楽部」「少女雑誌」などのほか思い出多い、講談社名も懐かしいと・・・

野間清治が我がふるさと桐生の先輩であることに誇りをもって「先輩に続けの合い言葉」に生誕の碑建立の節目が、新しい読書への目覚めとなることの予感である。

◇野間文庫読書推進賞◇

野間文庫読書推進賞は、桐生市立図書館に昭和五十四年講談社から図書の寄贈があり以来毎年継続され二万予冊を数えている。図書館に野間文庫が設置され、この名称を冠した読書推進賞が設けられ広く市民の読書の普及を促進し地域の教育文化活動進行の一助となればとの目的で、読書推進事業を行っている。

主な事業の一つとして野間文庫読書推進賞により、毎年秋、野間清治の命日の、十月十六日図書館前庭の野間清治顕彰碑前での献花式の日に、その年功績のある個人及び団体を表彰して顕彰している。

◇選考と受賞について◇

読書推進に貢献し讃えられるべき結果をのこしながらも、報われるこのの少ない個人・団体に贈呈

◇賞

賞状並ぶに副賞（講談社より図書一式

◇選考委員会◇

本賞の受賞者を選考するために野間文庫読書推進賞選考委員会にて選考。

◇受賞者推薦候補先◇

桐生市教育関係団体・学校等・文化関係団体。

◇連絡先（図書館）

〇二七七―四七―三一三四